〈論文〉

メキシコ農地改革における一村落の指導者をめぐる語り

—ミチョアカン州ティリンダロの「ドン・セベロ」*—

田中雅彦

はじめに

「大農園（hacienda）に奪われた先祖伝来の土地を取り戻すために戦う」、もしくは「土地を働く者の手に」。こうしたメキシコ革命の大義を現在でもメキシコの多くの人々に強く喚起する歴史上の指導者がいる。

例えば、エミリアーノ・サパタやラサロ・カルデナスである。農民の指導者として土地を取り戻すために戦ったサパタ、大統領として史上最大規模の農地改革を断行したカルデナスは、それぞれ現在でもナショナルなレベルで知られている英雄である。

では、こうしたナショナルな言説には現われない、ローカルな場面で土地の返還をめぐって戦った地方の指導者は、その地でどのように語られ、現在の住民に何を喚起するのであろうか。

本稿の目的は、メキシコ中西部ミチョアカン州の先住民プレペチャ（purépecha）地域に位置する共同体ティリンダロ（Tiríndaro）において、20世紀初頭に農地改革運動を率いた先住民指導者セベロ・エスピノサ（Severo Espinoza）[1]をめぐる「語り」を分析の対象とし、この問題に答えることである。[2]

1873年11月7日、父ペドロ・エスピノサ（Pedro Espinoza）と母マリア・カジェタナ・ガルシア（María Cayetana García）の間に生まれたセベ

ロ[3]は、生地ティリンダロにおいて、1909年に「土地返還　(restitución)」に向けての運動を開始する（Friedrich1977：vii)。[4]そして、1924年、村と隣接する大農園の土地をエヒードとして村のものにすることに成功し、110人のエヒダタリオが誕生する。

1920年代に始まる農地改革運動の目的のひとつは、大農園から土地を村に取り戻すことであった。また現在のティリンダロ住民は、「革命」、「農地改革」、その「大義」に対して、決して否定的な評価を下さない。[5]そのため、セベロをめぐる語りも、メキシコ革命の英雄をめぐる典型的な物語のローカルなバージョンに終始するように思われる。

しかしながら、セベロを典型的な「村の革命家」として語るためには、語り手たちは、ある忘却を共有しなければならない。さらにセベロと彼の運動を語り続けていくうちに、語り手によるセベロに対する評価は揺れ動き、「村の革命家」というステイタスを保てなくなる。セベロは、サパタやカルデナスのような英雄として、単純に語れないのである。

I　データとインフォーマントについて

本稿で利用するデータである「語り」は、1999年12月から2001年３月にかけて筆者がティリンダロでおこなった調査によって収集したものである。インフォーマントは、同村の古老たち（当時70歳から80歳代）である。彼らはセベロと同世代の人物ではなく、一世代下の人々である。彼らとセベロとの関わり方は様々である。他方、彼らの共通点は、セベロを個人的によく知っているという点にある。[6]

「語り」を資料として扱う際の問題のひとつとして、「語られた」ことが真実なのかどうか証明し難いという点がある。実際に、ある人の語りと別の人の語りの間に矛盾が生じたり、明らかに事実ではない話をする人もいる。[7]こうした状態では、「ジイさんの話を聞いて何の役に立つ。重要なのは公文書だよ。」という言葉も自然に出てこよう。この言葉は口述資料に対して懐疑的な研究者[8]のものではない。サカプ（Zacapu）に住むイン

フォーマントの一人が筆者に述べた言葉である。

しかし本稿の目的は、客観的に証明できる事実を列挙して年表を作ることではない。筆者は、語られた内容を整理して、一貫性のあるセベロの物語を構築する代わりに、そこに現われる亀裂や矛盾点をそのまま提示することで論を進めていく。なぜなら、亀裂や矛盾点もまた、テクストとして何かを語っていると筆者は考えるからである。

また本稿では、ティリンダロにおける「語り」と比較するために、隣村ナランハにおける「語り」も取り上げる。ナランハを比較の対象として選んだ理由は、隣り合う両村の語りを比較することで、ティリンダロの語りの特徴を明らかにするためである。そこで本稿では、米国の文化人類学者ポール・フリードリッヒの著作 *Agrarian Revolt in a Mexican Village* に書き付けられたナランハにおける農地改革運動に関する語り、そして筆者自身がナランハの古老におこなった聞き取り調査で得られた語りを比較の対象とする。なかでもフリードリッヒを知る人物であり、行政区長という経歴を持つナランハの古老カルロス[9]の「語り」を本稿では紹介する。

このフリードリッヒの著作とナランハの「語り」、そしてティリンダロの「語り」の関係について少し説明を加えておく。

両村が位置するシエネガ地区の農地改革運動がアカデミズムの世界で注目されたのは、上述したフリードリッヒの著作が出版されてからである。それまでにも、この地区の運動に触れる研究書はあった。しかしフィールドワークという手法で、一共同体の視点から詳細に農地改革運動を書き上げた研究者は彼が初めてである。彼はナランハの指導者プリモ・タピア（Primo Tapia）に注目し、プリモを中心とするナランハ農地改革主義者たちの視点からシエネガ地区の農地改革運動を描いた。

この民族誌は西訳されており、現在のティリンダロ住民も（読んでいるか、読んでいないのかは、ともかく）この本の存在を知っている。[10]実際に西訳を読み、フリードリッヒの本の中でのティリンダロの扱いについて筆者に苦言を申し立てるエヒダタリオもいた。なぜなら、プリモやナラン

ハの農地改革主義者が中心として描かれ、セベロやティリンダロの農地改革主義者は背景に押しやられているからである。[11)]

実際にティリンダロにおけるセベロをめぐる語りからは、フリードリッヒの著作で紹介されている語りや（現在公的に認められているといって良い）ナランハ中心主義的な「シエネガ地区の農地改革史」と対立する要素や、そこには現われない要素を数多く見出せる。こうした要素に注目することで、ティリンダロにおける「語り」の特徴を明らかにすることができる。

Ⅱ　調査地の概要

ミチョアカン州には、現在、先住民プレペチャが居住している地域がある。この先住民地域は慣習的に四つの地区に分けられており、そのうちのひとつが「シエネガ（＝沼）」と呼ばれる地区である。[12)]ティリンダロとナランハはこの地区に位置している。

シエネガ地区の農地改革運動において大きな役割を果たした、ティリンダロ、ナランハ、タレヘーロ（Tarejero）の三村は、現在サカプ行政区（municipio）に属している。行政区の中心地サカプは、メスティソの町であり、政治や経済が集中している。[13)]

Ⅲ　シエネガ地区の土地問題

はじめに、セベロら農地改革主義者たちが直面した土地問題、その土地の特徴と農地改革運動の流れについて説明する。

シエネガ地区の土地問題に関わる最も重要な事件は、19世紀末に行なわれた沼の干拓事業である。干拓以前にも、村と周辺の大農園との間で土地境界をめぐる争いは存在した（cf.　Guzmán 1984 : 31）。しかし干拓によって出現したカンタブリア（Cantabria）という名を持つ大農園の土地こそが、シエネガ地区の農地改革運動における最大の焦点となったのである。

シエネガ地区には、その名の通り、かつて巨大な沼が広がっていた。そ

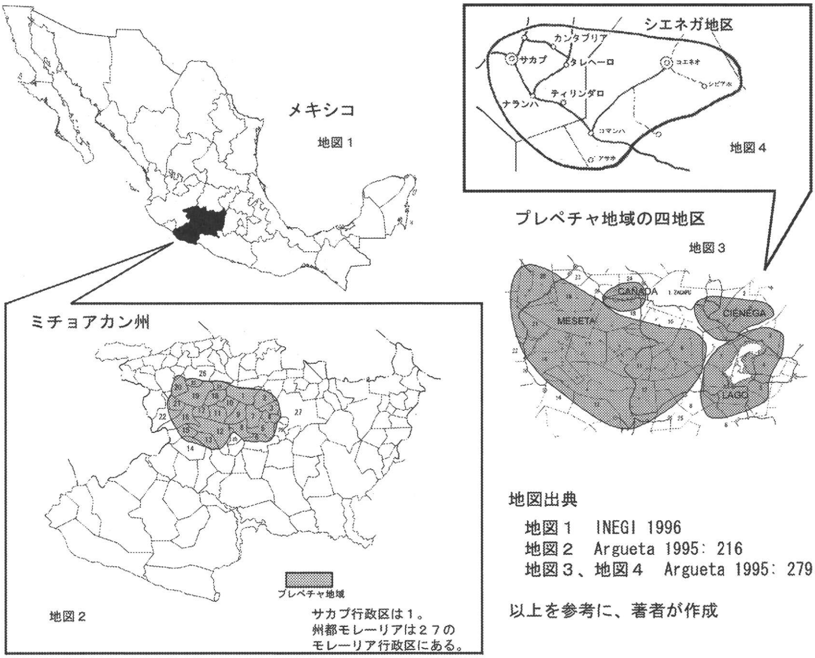

図１　調査地ミチョアカン州プレペチャ地域とシエネガ地区

こにノリエガという姓を持つスペイン人兄弟が登場する。彼らは、P.ディアス中央政府と交渉し、沼の干拓に取りかかる。また同時に、沼周辺の大農園や村（の一部の者たち）と、ある契約を交わす。それは、工事やその費用を負担する代わりに、干拓で生じる土地の３分の１を兄弟の所有地にするというものであった。工事は、カンタブリアという小さなランチョを中心にしておこなわれた。近代的技術と大資本を投下することで、ノリエガ兄弟は干拓事業を成功させ、肥沃な土地を持つ大農園カンタブリアが突然出現する。[14)]

その後、メキシコ革命が勃発する。1915年カランサが公布した農地改革法、そして1917年憲法により、土地問題を解決する道が開かれた。

しかしシエネガ地区では大農園の解体は全く進まなかった。そうした状況の中、土地返還を求める手続きをおこなう過程で各村に指導者たちが出

現してきた。ナランハにはホアキン・デ・ラ・クルス（Joaquín de la Cruz）、タレヘーロにはフアン・C・デ・ラ・クルス（Juan C. de la Cruz）という人物がいた。ティリンダロのセベロも、こうした20世紀初頭に土地返還運動を始めた指導者の中のひとりであった。[15)]

大農園の解体が進まないなか、彼らは干拓地に対する権利を主張する。そして、ティリンダロ、ナランハ、タレヘーロから土地を求める人々が集まり、1921年に農地改革共同体組合（Sindicato de Comunidades Agrarias）がティリンダロにおいて結成される。[16)]この種の組合の結成は、メキシコ史上初のことであった。こうして、シエネガ地区の農地改革運動は勢いを増し、前述したように、セベロは干拓地をエヒードとして村の所有地とすることに成功するのである。

Ⅳ　セベロをめぐる語り（１）：「村の革命家」

１　メキシコにおける革命家の位置

セベロの語りを見る前に、まずメキシコにおいて「革命」や「革命家」にどのような意味が込められているのか短くまとめておく。

革命の原因のひとつには、土地問題があった。革命前の政権がとった土地の私有化政策に乗じる形で村落の土地を奪っていった大農園に対する蜂起が各地方で生じる。

こうした運動、そして運動を率いた指導者＝革命家たちは、革命後のメキシコ国史の中で重要な位置づけを与えられた。「革命」は、メキシコの社会的文化的理念を決定づけるものとなり、メキシコ・ナショナリズムのひとつの核として位置づけられた。そして「革命家」は「メキシコ革命の精神」を体現し、その大義のために戦った人物とされた。[17)]

２　モニュメンタリズムの対象となるセベロ

革命で活躍した人物たちは肯定的に扱われる。さらに彼らはメキシコではモニュメント化される。[18)]

セベロも、ティリンダロの中だけではあるものの、モニュメントの対象となっている。村の中央広場（plaza）には、メキシコの国民的英雄ラサロ・カルデナス大統領の胸像があり、その横に、当の英雄本人から贈られたセベロの胸像が立てられている。広場の南に面する村役場（Jefatura de Tenencia）の壁には、セベロとカルデナスの肖像画が並ぶように描かれている。また広場の北側には「エヒダタリオ・セベロ・エスピノサ・教育センター（Centro Escolar Ejidatario Severo Espinoza）」と名付けられた建物があり、小学校として使用されている。

3　「村の革命家」としてのセベロ

ここから、セベロをめぐる「語り」のなかでも、彼の英雄的な側面を強調する「語り」をみていく。

セベロを「英雄・村の革命家」として語ろうとする際に用いられるエピソードには様々なものがある。しかし共通の特徴は、セベロをめぐる「語り」には常にナランハの指導者プリモが登場することである。

セベロと違い、プリモはローカルな指導者には留まってはいない。プリモの名声が、シエネガ地区を超えて届いていることをティリンダロの人々は良く知っている。またプリモがアカデミズムの研究対象になったことも有名である。

上述した農地改革共同体組合の組合長に選ばれたプリモは、地区全体の指導者であった。そのためティリンダロの住民が隣村の指導者に言及することは自然なことかもしれない。しかしティリンダロにおけるセベロをめぐる「語り」では、セベロとプリモが比較されるだけではなく、両者の優劣を付け難くしてしまうことに特徴がある。

（1）　運動の性格：先住民性をめぐって

土地問題「だけ」に焦点を当て、村と大農園の対立から農地改革闘争が始まった、と語る人々がいる。他方そこに民族間関係を付け加えて語る

人々がいる。

ここでは、アレハンドロ[19]の語りを紹介する。彼は、先住民と非先住民との間にあった緊張状態や、何語でセベロやその仲間たちが話していたのかを語ることで、セベロや彼の運動の先住民性を強調する。

「［私たち家族は］動物を飼いながら生活をしていた。いいかい、先住民（naturales）だけで、家畜の世話をしていたんだ。非先住民（gente de razón）は、わしらのことを気にくわず、『インディオ（indio）』と呼んでいた。セベロも先住民だった。少しはカステジャーノを話した。でも片言だった。彼は弁護士や将軍たちなど、多くの人たちと話すために［西語を］独学しなければならなかった。セベロはなんとか話せるようにはなった。でもほとんどダメだったな。」[20]

この時代、話す言語の違いは、先住民と非先住民を区別する指標のひとつとして決定的に機能した。そのため、先住民言語は「農地改革運動中、重要なシンボル」でありうることができた（Friedrich *op. cit.*: 9）。

しかし、ナランハのプリモは「闘争を根本的にエスニック的なもの、もしくは人種的なものとしては決して描かなかった」（*Ibid.*: 112）。

ナランハの古老カルロスによると、米国からナランハに戻ってきたプリモは、「先住民性」と運動とを切り離すように「土地返還」運動を続けていたセベロに持ちかける。[21]

「『あなたたちはホアキンらと行動をともにしてきた。しかし、土地返還運動は進むべき道ではない。ここに土地申請者を結成するためのリストがある。先住民ではなく、申請者として土地を要求しよう。』こうして［プリモが］セベロを呼んだんだ。」

プリモによって、先住民と大農園との関係をめぐる「先住民の土地問題」は、プロレタリアートと資本家が対峙する「経済的問題」へと姿を変えた。さらに運動の性格から先住民性を消し去ることは別のことをも意味していた。それは土地獲得戦略の転換である。

「土地が先祖伝来のものであること」を公文書によって証明しなければ

ならなかった「土地返還」運動から、そうした手続きを必要としない「土地贈与（dotación）」へと運動の戦略をプリモが変えたのである。この転換は、干拓地の所有権を証明できず停滞していた運動を前進させることになった。

そのため、カルロスは従来の土地返還を求める運動とプリモ後の運動の「断絶」を強調する。一方、ティリンダロにおいて、こうした土地獲得戦略の転換が詳細に語られることはない。

（2） セベロとプリモ：鏡像

イメージ形成の観点から見ると、ティリンダロ住民がセベロを語る際にプリモを登場させるのは、プリモのイメージがセベロのイメージを形作るときに有効に作用するからである。この二人は鮮やかな対照をなしているため、セベロのイメージをより鮮明に構築することができる。

もっとも対照的なのは、彼らの言語能力の差である。

プリモは二言語を併用できた。その理由は、当時の一般的な先住民のそれとは大きく異なっている彼の特異な経歴にある。[22)]

セベロは片言でしか西語を話せず、読み書きができなかった。この「読み書きができなかった」というフレーズはセベロの語りのなかで、決まり文句となっている。

これはセベロの「先住民性」を強調する表現である、しかし同時に、彼の「教養」の欠如を示す一例としても語られる。さらに「教養」の欠如は権力への障壁であったとも考えられている。

「ドン・セベロが大きな権力を得たことなど一度たりともなかった。というも彼には教養がなかったからだ。州知事になったわけでもない。」

こう語るアレハンドロは農地改革共同体組合の組合長にプリモが選ばれた理由を、彼が「できるヤツ」だったからだと説明する。教養や権力という観点からみれば、プリモとセベロは比べ物にならないのである。

（3） セベロはプリモに劣らない

インフォーマントたちは、プリモの教養がセベロよりも優れていたことを簡単に認める。さらにセベロは大きな権力も持たなかった。しかし、だからといってセベロを過小評価したりはしない。それどころか、セベロの欠如を別の何かによって埋め合わせるかように語るのである。

組合長に選ばれたのはプリモである。しかしアレハンドロは、ティリンダロにおいて、メキシコ史上初めて、農地改革共同体組合が結成された事実を誇りにしており、そこにセベロの影響力の強さを見ている。

また革命家としてのセベロの価値を高めるエピソードとして、ラサロ・カルデナスとの友好関係が語られる。プリモはラサロとの関係が深くなかったため、この点はティリンダロで強調される。セベロとカルデナスとの友好関係もまた、セベロをめぐる語りのなかで必ず出てくる決まり文句である。[23)]

さらに、セベロは度胸（valor）のある革命家だったという語りもある。

ここでは村の指導者たちを買収しようとした大農園主に対する、プリモとセベロの対応の違いが語られる逸話をとりあげる。はじめに、フリードリッヒがプリモの才覚の例として紹介した逸話を紹介する。

「1922年初め、プリモは、カンタブリアのスペイン人兄弟から密書を受け取った。その夜、プリモは（略）彼らと会合を持った。そこでは相当な額の買収話が持ちかけられた。（略）次の夜、プリモは金を受け取り、すぐさまモレーリアへと発った。そして、そこでの生活費と、エヒードの暫定的譲渡に必要な法的費用として、その金を使ったのである」（Friedrich *op. cit.*：91）。

他方、ティリンダロの古老ダニエル[24)]が語るバージョンでは、ナランハの逸話では完全に消えていたセベロが登場する。

「セベロとプリモが農園主と話し合いに行った時のことだ。農園主はプリモに言った。『中に入れ。話そうじゃないか。』セベロは彼らを待っていた。セベロは後から中に入ったんだ。この農園主は二人に欲しいものを提

供しようとした。好きなだけの金だ。その代わりに戦いを止めるようにもちかけた。話によれば、プリモはこう言った。『たっぷりとくれよ。だったら約束しようじゃないか。』どれぐらいの金を受け取ったのか、私は知らない。そしてプリモが出た後、セベロが中へと入った。『セベロよ、どれだけ金をやれば、争いを止めてくれるのだ。好きなだけ金をやろう。そして、あの辺りに綺麗な家でも建てて、王様のように暮らせよ。』セベロは答えた。『いや、私は金など欲しくはない。』この金でプリモは、ますます力をつけた。プリモは知識人で、物知りで、言葉巧みだった。まるで有能な弁護士のようだった。しかしセベロには度胸があった。」

セベロとプリモの行動をめぐって、両村での答えが対照的な違いを見せる別の事例がある。それは「現在、なぜティリンダロとナランハでは、エヒダタリオ一人が用益権を有する個別エヒードの一区画面積に差があるのか」という問いに対する答えである。

ティリンダロにおけるエヒダタリオの数はナランハの半分である。そのため個別エヒード一区画の面積は、ナランハの二倍となっている。カルロスはプリモとセベロを比較し、次のように語る。

「プリモは土地の区画を小さく小さく区切って、村の全員に行き渡るようにした。セベロは区画を大きく区切った。というのも、土地請求者リストに載っていた人々だけに土地を分配したからだ。これは社会主義的ではない。セベロにそんな思想はなかった。（略）ティリンダロにはエゴイスモがある。あっち［ティリンダロ］は4.5ヘクタール。ここ［ナランハ］は２ヘクタールだ。なぜか。セベロがプリモよりも賢明だったからじゃない。ナランハでは、プリモはこう言った。『村のみんな、集まって来いよ。リストに載っていない人も土地を得ようじゃないか。』」

カルロスは、セベロ（とティリンダロの農地改革主義者たち）はエゴイストだったと考えている。彼が使う「エゴイスト」という言葉は単なる侮辱ではなく、セベロの別の欠如を表している。それは「社会主義的思想」である。そのことをカルロスが説明する際に使った事例として、上述した

例以外にも、セベロが学校に代表される社会的建築物を作らなかったというものがあった。[25)]

このナランハの古老は、エゴイストで社会主義的思想が欠如しているセベロによって、現在の二つの村で違いが生じていると考えている。

ところが、ティリンダロの人々は、両村の違いの原因を別のところに求めるのである。

「セベロは家から家へすべての人を訪ねまわった。『ついに土地を得たぞ。土地が欲しいと俺に言ってくれよ。』　しかし大部分の人は『いらない。』と答えた。セベロは彼らに言った。『ちょっと待ってくれ、何のために種を蒔くんだ？　子供たちはエローテを食べたがっているじゃないか。人数に合わせて土地は分配される。もう土地を分配する用意ができているんだぞ。』結局110人の家長だけがセベロに従った。［現在］シエネガで種を蒔いているのは彼らだよ。」（ダニエル）

ティリンダロにエヒダタリオが少なく、それゆえ一人当たりに割り当てられる区画面積が大きな理由は、単純である。カルロスが語るプリモのように、セベロはできるだけ多くの人々に土地を分配しようとした。しかしティリンダロの住民自身が土地を欲しなかったのである。

なぜティリンダロの住民は土地を欲しがらなかったのか。エヒードとして分配される土地を拒否するという行動の裏には、教会の介入、もしくはその影響がある。

農地改革主義者たちによって作成された文書には、大農園側についた人々の名を列挙したものがある。そこには、当時のティリンダロの司祭の名が上げられている。そして、その司祭自身が防衛隊長として「反農地改革派」を統率していると糾弾されている（A. Embriz y R. León 1982 : 27)。他方、ティリンダロの元司祭パディージャは、この司祭と大農園の関係を否定している（Padilla 1977 : 63)。

現在のティリンダロのインフォーマントたちはパディージャの意見とは真っ向から対立する「語り」を紡ぎだす。そこでは大農園側についた司祭

が、「地獄」「悪魔」という語彙を使いながら、大農園の土地を奪わないよう人々に説教をした様子が語られるのである。

Ⅴ　「英雄・村の革命家としてのセベロ」を支える枠組み

ここで、これまで紹介してきた「村の革命家」「英雄」としてセベロを語る際に語り手が準拠している枠組みを明らかにしておく。

セベロと農地改革運動について語るティリンダロ住民には、一つの枠組みが共有されている。しかし、それは、ある忘却の上に成立するものである。

その枠組みとは、「大土地所有者によって土地を奪われた先住民が、元来自分たちのものであった土地を取り戻すために戦った」というものである。1917年憲法が念頭においていた土地をめぐる状況であり、現在でもナショナルなレベルで流通している革命と土地問題をめぐる言説である。例えば、チアパスなど他の地域では上記の枠組み内で語ることができる事例がある（cf. 清水1988：42－46）。しかしながら、こうした事例と比較すると、シエネガ地区の土地問題は特殊なものであることは明らかである。問題となっている土地は「奪われた土地」ではなく、「干拓することで出現した土地」だからである。干拓で突然現れた土地が問題となるこの地区に関する限り、上述した枠組みを簡単に当てはめることはできない。[26)]

こうした特殊な土地に対して所有権を主張するという難問をいかに解決したのかという点は、カルロスの語りに表れているように、プリモをめぐる語りの要となっている。運動から「先住民性」を消し去り、「土地返還」から「土地譲渡」へと土地獲得の戦略を転換することで可能になったのである。

一方、ティリンダロにおけるセベロの語りでは、問題の土地が干拓地であったという特殊性は忘却されている。また「土地返還」と「土地譲渡」の根本的な違いも語られず、農地改革運動の戦略は、その始まりから成功まで、連続性があるかのように語られる。

こうした忘却の共有によって、セベロの語りは「収奪された土地をめぐって大農園と争い、それを取り戻すために戦った先住民指導者」という、革命と土地問題をめぐる語りの枠組みの中に回収することが可能となっている。また教会と大農園の関係に対する「語り」も、事実はどうあれ、革命後の政府が取った反カトリック的姿勢[27]とそのイデオロギーが用意した枠組みに沿って語っているともいえる。それがよく現われているのが「司祭は殺された。」という言葉である（註７を参照)。

こうして、ティリンダロの古老たちは、セベロを「村の革命家」として語ることができるのである。

Ⅵ　セベロをめぐる語り（２）：「村内分裂」

隣村のプリモほど有名ではないが、あのラサロ・カルデナスとも親密に連絡をとりあい、「大義」を持って土地をティリンダロに取り戻した人物。このようにして「ドン・セベロ」をめぐる「語り」は彼への共感や肯定的評価だけで締めくくられても良いはずである。

しかし、セベロをめぐる「語り」では、「英雄・村の革命家」という「語り」に回収できない事実も語られる。このとき、セベロは英雄とは程遠い姿になって現われる。ついに干拓地が村のものとなったのに、その土地を受け取る人がティリンダロには少なかったという語りの中に、セベロが上述した枠組みに回収されえない要因がすでに現われている。

それは、村「全体」がセベロを支持していた時期は一度たりともなく、村は常に分裂した状態にあったということである。

「村の革命家」を語っていた語り手たちが「村内分裂（división)」という言葉を出す時、彼らの語るエピソードは急激に具体的な相貌を得る。セベロ、プリモ、ラサロといった有名人だけで構成されていたセベロをめぐる「語り」は、非常に個人的な話に移り変わっていく。

セベロをめぐる語りの中で出てくる「分裂」という言葉は、ティリンダロ史における二つの時期を意味する。第一期は、セベロを筆頭とする農地

改革主義者たちと大農園・教会が対峙し、村人達もどちらかに従い、村が分裂していた時期である。第二期は、大農園の土地がエヒードとなった後、農地改革主義者たち自身が内部分裂する時期である。

1　村内分裂の第一期

第一期において、村役場は大農園と教会の側に付いていた。この時の村長は、エステバン[28)]の代父のひとり[29)]であり、書記はダニエルの兄のひとりであった。

「セベロを援助した人々がいた。彼らは土地を欲しがった人々だ。また大農園側に付いた人々もいた。というのも、大農園は種を蒔く土地を彼らに提供していたからな。金の都合もつけてやっていた。そして農園を守るための武器も与えていた。セベロに刃向かった人々、つまり大農園側につく人々が、ティリンダロでは多かった。大部分の人々が大農園側に付いた。わたしの兄弟の一人も大農園側だった。彼はライフルを一丁渡されていたよ。」（ダニエル）

1922年、ティリンダロへの土地譲渡を阻止しようとカンタブリア農園が州裁判所に訴え出た時、456名からなる「土地譲渡に反対する農民のリスト」が資料として提出されている。[30)]その中には、ティリンダロ住民であり、かつ農園で働いていた人々の名と署名が記されている。彼らが無理やり署名させられたのかどうか、この署名の意味をわかっていたのかどうかは不明である。しかし確実なことは、セベロや農地改革派から「反農地改革派」と呼ばれる人々のなかにティリンダロ住民が多数いたということである。

2　ティリンダロ攻略[31)]

「農地改革主義者／大農園・司祭（教会）」という二分法で語られる第一期は、1924年2月2日の「ティリンダロ攻略」で終りを告げる。

この戦いで、ティリンダロの農地改革主義者たちは、他村の農地改革主

義者の援助を得て、村を襲い、役場・教会・広場を乗っ取り、村の権力を握った。この時、セベロについて戦ったティリンダロ住民は、わずか13人（もしくは15人）だけである。村を急襲した農地改革主義者たちは、ティリンダロの「反農地改革主義者」を殺すか、村から追放した。この戦いでエステバンの代父は殺され、ダニエルの兄は米国まで逃げていった。ティリンダロの農地改革主義者たちは、その後、教会を閉鎖し、聖人像を焼き、そこを穀物倉庫に変える。村からカトリック的なものを一掃したのである。

しかしながら、村人全員が農地改革主義者になったわけではない。また教会の機能が停止したからといって、村からカトリック信者が消えたことはない。教会側は、シエネガ周辺の状況を鑑み、ティリンダロの信徒たちの対応を、別の村の司祭たちに一時的に委任していた。

すでに示したように、理由はどうあれ、「ティリンダロ攻略」後、エヒードとして分配される予定の土地を受け入れようとする人々はティリンダロでは少なかった。農地改革派は村の実権を手に入れた。しかし、村内分裂は続いていたのである。

3　村内分裂の第二期

「ティリンダロは２月２日の出来事を決して忘れてはいない。」とフリードリッヒは書いている（Friedrich *op. cit.*：108）。現在でもそうである。まずはじめにどこから銃声の音が聞こえてきたのか、どの方角から農地改革派がティリンダロ内に攻め入ってきたのか、さらに具体的な名前が出され、誰がどこでいかなる方法で殺されたのか、また逃げた人々の消息が語られる。

この戦いに加え、村内分裂の第二期は本稿のインフォーマントたちにとって生々しい出来事として記憶されている。ダニエルの家族は農地改革派と大農園派に分かれており、大農園側についていたダニエルの兄の一人は、すでに述べたように、村から逃げた。残った別の兄はセベロについて土地を得た。しかし農地改革主義者たちが内部分裂した時、セベロ派から

離脱する。すると今度はセベロ派から命を狙われることになってしまう。

「わたしの兄の一人はエヒダタリオで、セベロと一緒に行動していた。彼を守るために拳銃一丁持ってな。しかしその後、兄はセベロのグループから離れた。すると今度はセベロ自身が私の兄を殺せと命令したんだ。お互いに殺しあってたよ。ここで多くの人が死んだ。」（ダニエル）

農地改革主義者たちの内部分裂が、以前から続く村の分裂状態に加わり、村の日常は混乱に支配される。農地改革主義者たちが分裂した原因を「野心」だと説明する人や金だと説明する人もいる。また、この時期は、ある分派に属する人々と別の分派に属する人々が結婚することも不可能なほど、村は緊迫した状態であったとも語られる。

セベロに対して辛辣な態度で語った古老は、セベロの姪を母に持つフェルナンド[32)]である。

「ドン・セベロの偉業は、村を分裂させたってことだ。そう、イグナシオ・ルイス（Ignacio Ruiz）派とドン・セベロ派にな。イグナシオがセベロから分かれて、自分のグループを作った。どちらも農地改革主義者だった。村はすでに分裂状態だった。まずこの二つのグループ。そして、カトリック信者のグループ。これで、もう三つのグループだ。すぐに殺し合いが始まった。夜には誰も出歩かなかったよ。」

また、土地がエヒードとして正式に分配された後でも、セベロは彼の意に沿わない人からは個別エヒード区画を奪い、時には殺したと語られる。ダニエルはセベロから次のような話を持ちかけられている。

「『お前に一区画をやろうか。気に入らないヤツらがいるんだ。』『ドン・セベロ、ありがとうございます。しかし……。』『まぁ、お前が欲しけりゃな。』（略）彼は気にくわない人からは土地を奪った。彼に協力しなかった人々には、エヒードの一区画を奪うと脅していたんだ。」

このようにセベロは、資源の流れを意のままにコントロールし、殺人と暴力で村を支配するカシケ（cacique）として語られる。[33)]ただし、「セベロ自身は決して人を殺めず、命令していただけだ。」という決まり文句が

ついてくる。

結語：セベロを召還するときに、喚起されるもの

プリモはナランハの、そしてシエネガ地区の指導者であった。しかし、ティリンダロの人々も一人の指導者に率いられ、奪われた土地を取り戻すために外国人農園主が経営する大農園と戦った。その指導者こそ「村の革命家」セベロである。プリモより度胸があり、ラサロ・カルデナスと懇意な間柄であった指導者に率いられてティリンダロの人々は戦った。

ナショナルなレベルで流通している革命と土地問題をめぐる言説に関わる枠組みに沿いながら、干拓地であったという土地の特殊性に対する忘却を共有することで、インフォーマントたちはセベロを「英雄・村の革命家」として語ることができる。

しかし、さらに具体的にセベロや農地改革主義者たちが誰と戦ったのかを語り続けるうちに、戦った相手の顔が明確に見えてくる。それはティリンダロ住民たちの顔である。現実に戦いを繰り広げたのは「農地改革派」「大農園」「教会」というカテゴリーではない。人と人である。農園側についていたとしても、教会側についていたとしても、セベロが戦った相手にはティリンダロの人々が含まれていた。「ティリンダロ攻略」時、殺された村長はエステバンの代父であり、村から逃げた秘書はダニエルの兄であった。さらに「村の革命家」が獲得した土地を分配しようとした時、その申し出を拒否したのはティリンダロ住民自身である。村内分裂の第二期は、さらに明確である。顔見知りの住民同士がそれぞれのグループに分かれ、村の内部で抗争を繰り広げたのである。

インフォーマントである古老たちは、セベロが村の土地を得るために大農園と戦い、ティリンダロに土地が与えられたのは彼の功績によるものであることを理解している。そうして、彼らはセベロに革命の「偉大なる大義（la noble causa）」を実現した英雄的な功績者の姿を見る。しかし同時

に、村内分裂とそれに伴う暴力と殺人をも思い出してしまう。

時間軸に沿えば、革命の大義に沿った大農園に対する戦いから、身内への暴力となる村内分裂へと時代が進むに従い、セベロは英雄から悪漢もしくはカシケに姿を変える。インフォーマントの多くは、セベロをこの図式に沿わせ、その変貌を語ろうとする。

しかしその試みは失敗する。なぜなら、セベロが「村の革命家」として活動していた時期は、村内分裂の第一期である。セベロら農地改革主義者たちが相手にしたのは、外国人農園主だけではない。農園側・教会側についたティリンダロの住民とも対峙していた。初めから村は分裂していたのである。そして第二期には、ティリンダロ住民同士が村のなかで、直接、暴力と殺人の応酬をおこなったのである。

このように、セベロの功績について述べている時、語り手には村内分裂という事実が重くのしかかってくる。逆に、村内分裂の元凶として彼を非難しようとする時、彼の功績が目の前に立ちふさがる。セベロを語る時、こうした事実が一挙に語る者の頭の中を駆け巡る。そのため、セベロを英雄として単純に語ることができない。「村の革命家」という枠組みに回収しようとした瞬間、そこに回収できない村内分裂という事実を思い出すからである。これは、土地の由来の特殊性のように忘却することができない。逆に悪漢・カシケとしても単純に語れない。隣村のプリモほど有名ではないが、しかし、彼にも劣らず、国民的英雄像にも連なる「村の革命家」がティリンダロにもいたという事実を語らないわけにはいかないからである。

セベロについて語りだす時、彼のことを知っていれば、知っているほど、彼について詳しく話せば話すほど、単純な英雄像や悪漢像を構築することができなくなっていく。その結果、セベロのイメージは常に揺れ動き、その評価は口に出る度に異なってくる。

この傾向は、彼のことをよく知っている人々に顕著にみられるものである。セベロのことをあまり知らないから、うまく語れないのではない。そうではなく、彼がおこなったことをよく理解しているからこそ、彼につい

て語ること、彼のイメージを固定させることが困難となるのである。セベロをめぐる「語り」によってティリンダロの過去を振り返る時、現在のティリンダロ住民は、いまだにセベロ・エスピノサという存在によって動揺させられているのである。

セベロが喚起するものとは、ティリンダロの人々も革命の大義を持って大農園と戦ったという歴史であり、同時に、村が分裂して住民同士が暴力と殺人の応酬を繰り広げたという歴史である。

＊　本研究はメキシコ外務省による奨学金によって可能となった。調査中には、ミチョアカン大学院大学（El Colegio de Michoacán）の先生方や院生諸氏、特にアウグスティン・ハシント（Augstín Jacinto）先生から多くの助言をいただいた。またティリンダロをはじめ、周辺各共同体の方々には貴重な時間を割いて調査に協力していただいた。最後になるが、本誌への投稿にあたり、査読者の方々からも貴重なご教示を賜った。

ここに記して、以上の方々に深く感謝申し上げます。

註

1）　以降、本稿では「セベロ・エスピノサ」や他の人物を指す場合、現地の慣習に従って、苗字ではなく名を使用する。

2）　メキシコ革命や農地改革に関する、文書資料に基づく歴史学的研究では、ポピュリスト的解釈は1960年代に再検討され、修正主義が生まれ、近年ではポスト修正主義が登場している。（cf. Boyer 2003 : 7–12.）歴史学は独自に歴史解釈を発展させている。しかし、農地改革闘争の場となった地に生きる人々自身による農地改革史解釈は研究対象とはなっていない。他方、文化人類学者のフリードリッヒ（彼の民族誌については本文内で後述する）は、ローカルな視点から農地改革史を描いた。しかし註11で示すように、彼の描いたシエネガ（Ciénega）地区の農地改革史は、調査地ナランハ（Naranja）のバージョンである可能性が強い。

　本稿も、フリードリッヒと同じく、文化人類学の立場から農地改革史を扱う。しかし単にティリンダロのバージョンを示すだけではなく、ローカルな解釈とナショナル・地域レベルで流通している言説との関係を視野に入れながら、同村の「語り」の特徴を明らかにする。そして「語り」のなかでも、村によって異なるバージョンの逸話、「正史」に回収不可能な語り、「正史」

への異議申し立てともいえる証言や記憶に注目し、従来のものとは異なる農地改革史を叙述する可能性を開きたい。この「歴史の別の可能性」の叙述は今後の課題とする。

3) Actas de bautismo. Libro 33, Año 1873–1875, Registro 407. APC.

4) すでに1910年には、ティリンダロの村役場はセベロの動向に関する報告書をパツクアロやサカプの役所へと頻繁に送っている。ここから、彼が監視の対象であったことが伺える。（“Correspondencia con la Sub– Prefectura para el año de 1910,” AJTT.）セベロが土地返還の申請を、村の先住民代表として、正式におこなったのは1915年である。

5) 調査地ミチョアカン州では、ラサロ・カルデナスの人気はいまだに高く、彼の息子や孫が所属する政党PRDの支持率も依然高い場所である。こうした背景も、このような住民の態度に関係している。

6) インタビューはすべて西語でおこなった。そのため古老たちの発言もすべて西語である。本稿で引用する発言はすべて録音している。

7) 例えば、「ティリンダロの司祭は『ティリンダロ攻略』時に農地改革派の手によって殺された。」と話した人がいる。「真／偽」という判断基準を用いれば、これは「偽」である。司祭は殺されずに逃げたことが、別の資料から確認できるからである。しかしここで問題となるのは、司祭が「殺されたのか／殺されなかったのか」という事実の同定ではない。「農地改革派によって司祭は殺された。」と語ったのはなぜか、という理由である。この点に関してはトドロフの次の考え方が参考になる。

「イデオロギーの歴史にとって言表の受容は、イデオロギーの産出以上に示唆的である。だから作者の間違いや嘘があっても、そのテクストは真実をのべているときと同様にはっきりした意味をもっている。テクストが同時代人に受けとられるものであること、あるいは作者が受け取られると信じていたということ、これが肝心である。」（トドロフ1986：73）

「農地改革派によって司祭は殺された。」という言表は、革命後のメキシコにおいて、「ありうる話」として受容されるのである。

8) A. J. P. テイラーの辛辣な言葉を参照せよ。（G. プリンス1996：131）

9) 以降、本稿で出てくるインフォーマントたちの名はすべて仮称である。

10) ティリンダロ住民がよく言及する別の本に、ティリンダロの元司祭パディージャが著した*Tiríndaro*がある。この本は、先スペイン期からのティリンダロの歴史を記している。ティリンダロ住民が、村の歴史を語る場合、陰に陽に、この本を引用しながら話す場合が多い。

こうした民族誌（出版物）・語り・歴史認識の相互関係について考えることは重要である。

11）「ナランハの視点」から書かれた民族誌のなかで、ティリンダロが背景に退くのは当然と思われるかもしれない。しかし、ここではフリードリッヒの著作における二つの問題点を指摘しておく。
①彼がプリモの調査をおこなった1950年代半ばは、この地区においてナランハが圧倒的な覇権を握っていた時期である。これは彼の別の著作 *The Princes of Naranja* の記述からも明らかである。このような状況下で調査をおこない、聞き取られた農地改革史の「語り」がナランハ中心主義的になるのは避けがたい。
②この民族誌の西訳の「訳され方」に問題がある。この西訳は「一共同体の視点から農地改革を見る」というフリードリッヒの姿勢を完全に無視する形で訳されており（そうした説明部分は削除されている）、客観的な歴史書の体裁をとっている。そのため「ナランハの視点」や「歴史の別の可能性」は読み取れず、「歴史的事実」を列挙しているかのように書かれている。英語が読め、原著と比較することができる研究者は、この西訳を「悪訳」として無視することができる。しかしティリンダロを含む周辺共同体の人々にとって、その西訳は依然「ナランハにいた外国人研究者が書いたシエネガ地区の農地改革史に関する本」である。
以上のことから、フリードリッヒの著作、そしてその「西訳」は、ナランハへのさらなる権威付け、さらに、この地区の人々の農地改革に関する歴史認識形成に影響力を持ったと筆者は考えている。
この問題は、註10で示した「民族誌（出版物）・語り・歴史認識の相互関係」にも関わっており、別の論考で扱う予定である。
12）四つの地区は、「山地（Meseta）」「湖（Lagos）」「渓谷（Cañada）」「シエネガ」と名づけられている。筆者は、現地の人々の分類に従い、四地区に分けている。言語学的観点からメスティソ化の進んでいるシエネガ地区を先住民地区とは認めず、三地区だけの分類をする研究者もいる（cf. Chamoreau 1996 : 74）。
13）メキシコの先住民地域、及び行政区の様態は、場所によって大きく異なる。プレペチャ地域の場合、先住民地域と呼ばれてはいるが、しかし、その内部にはメスティソの町を数多く含んでいる。行政区は、中心となるメスティソの町と、その周りをとり囲む先住民の村々によって、構成されている。（行政区の中心が先住民の多い場所である場合は例外的である。）また地域内には経済的・文化的差異も存在する。シエネガ地区の中心地サカプは、約６万3000人の人口を擁し、常設の市場や大手銀行、商店、映画館、大学まである。他方、ティリンダロの総人口は、2960人である。そのうち何らかの職についている者の内訳は、第一次産業従事者263人、第二次産業113人、第三次産業304人である（INEGI：1991）。ティリンダロの生業活動におけるエヒードの

重要性は「経済的」には低いといえる。

14） 干拓工事終了時には、ノリエガ兄弟は3988.08ヘクタールの土地を得た。彼らと交渉した他の農園主たちもまた契約に見合った土地を得た。しかし、周辺の村々は合わせても405.44ヘクタールの土地を得ただけであった（A. Embriz y R. León García 1982 : 21）。

15） セベロの活動開始時期の早さは、ホアキンに次ぐものであった（Friedrich 1977 : 54）。

16） 通常「Comunidad Agraria」は「農業共同体」と訳される。しかし、本稿が扱う「Comunidad Agraria」には、農地改革という目的に自覚的な人々が関わっているため「農地改革共同体」と訳出した。

17） 例えば、サパタは国家的文化記号となった。（落合1996：59）

18） メキシコには胸像をはじめ、記念碑や記念塔というモニュメントが溢れかえっている。（cf. 落合1988）

19） アレハンドロは、マデロ主義者であった義兄の影響を受け、青年期にはセベロと行動をともにした元農地改革主義者である。

20） 本稿の直接話法には筆者の修正が入っている。読みやすさを優先し、古老達の話す西語の特徴である「表現の繰り返し」を削除している。また[ ]は、筆者による補足である。

21） プリモは米国帰りだった。プリモの経歴は、註22を参照せよ。

22） プリモは神学校に送られている。そこでの教育、「特に西語での読み書きを学んだことは、後年、彼に『非常に教育された』という特別なステイタスを与える際に決定的であった」（Friedrich *op. cit.* : 61）。

その後、プリモは村を出て米国に向かう。そこでマゴン（Magón）兄弟が「彼に英語を教えながら、夜間学校に行けるように援助した」（*Ibid.* : 64）。こうして「メキシコ人以外の者に対して演説ができる」（*Ibid.* : 70）までになっていた。

23） 二人の友好関係は、セベロを直接知らない世代のティリンダロ住民によっても語られる。

24） ダニエルの父と兄のひとりはセベロに協力している。彼自身もセベロとは友好関係にあった。しかし父の死後、エヒードの相続はせず、エヒダタリオとはならなかった。また別の兄は「反農地改革派」であった。

25） 現在のティリンダロの小学校は、もともと教会の建物であった。それをセベロら農地改革派が押収し、学校にした。カルロスは、セベロが学校の建築自体をおこなっていないことを強調したのである。

26） この特殊性はカンタブリア農園側も十分に意識していた。1922年、当時の州知事がティリンダロに対して土地譲渡の許可を出すと、すぐさまカンタブ

リア側は訴訟をおこす。「問題の土地は、干拓地であり、収奪した土地ではない。」と訴え出たのである。(Legajo núm. 147 No.139 de 1922 [Amparo, caja 9, expendiente núm 26 同封の書類], ACCJM.)

27)　1917年憲法は反教権主義を重要な柱としていた（国本・畑・細野　1984：136)。さらにカジェス大統領時代の1926年には、刑法が改正され、憲法が定めた反カトリック的姿勢に反した者に刑罰を加えることができるようになった。また外国人司祭の追放やカトリック系学校の閉鎖などがおこなわれた。（鈴木2003：76)

28)　エステバンの父はセベロと懇意な関係にあった。一方、彼のイトコであるヴィクトール・アパリシオ（Victor　Aparicio）は1930年代初期「キリスト教主義的農地改革派（agrarista cristiano)」を立ち上げる。しかしセベロらにリンチにあい、殺されてしまう。この件に関してはフリードリッヒもその著で触れている（Friedrich 1986 : 152, 155)。

29)　本稿36ページで触れた、反農地改革主義者・農園側の人物を糾弾する文書の中に、エステバンの代父の名前がみられる。

30)　Legajo núm.147 No.139 de 1922[Amparo, caja 9, expendiente núm 26 同封の書類], ACCJM。

31)　ティリンダロ攻略の記述は、インフォーマントたちの語りと Friedrich（1977：107－108）を参考に、筆者がまとめたものである。

32)　フェルナンドの父はティリンダロの小学校教師であった。彼自身も教職についていた。調査当時は、村役場の秘書であった。

33)　結局ダニエルはセベロの申し出を断っている。カシケ政治の特徴は、Friedrich 1986、吉田2001を参照せよ。

参考文献

落合一泰. 1988.「ラテンアメリカのモニュメント、モニュメントとしてのラテンアメリカ」(『現代思想』臨時増刊総特集 ラテンアメリカ 増殖するモニュメント)、8－30ページ。

————. 1996.「文化間性差, 先住民文化, ディスタンクシオン」(『民族学研究』61巻1号)、52－80ページ。

国本伊代・畑恵子・細野昭雄. 1984.『概説メキシコ史』有斐閣。

清水透. 1988.『エル・チチョンの怒り－メキシコにおける近代とアイデンティティ』東京大学出版会。

鈴木康久. 2003.『メキシコ現代史』明石書店。

トドロフ, ツヴェタン. 1986.『他者の記号学－アメリカ大陸の征服』及川馥・大谷尚文・菊池良夫訳、法政大学出版局。

プリンス，グイン.1996.「オーラル・ヒストリー」、中本・谷川訳（ピーター・バーク編『ニューヒストリーの現在』谷川稔・谷口健治・川島昭夫・太田和子ほか訳、人文書院）、131－164ページ。

吉田栄人.2001.「抵抗の政治学－カシケを支える大衆の政治論理」（遅野井茂雄・志柿光浩・田島久歳・田中高編『ラテンアメリカ世界を生きる』新評論）、161－175ページ。

ACCJM ; Archivo de la Casa de la Cultura Jurídica, Morelia.

AJTT ; Achivo de Jefatura de Tenencia, Tiríndaro.

APC ; Archivo Parroquial de Coeneo.

Argueta, Arturo Villamar.1995. "Los Purépechas," en *Etnografía Contemporánea de Los Pueblos Indígena México : Región Centro*.(Mexico : INI/Secretaría de Desarrollo Social), pp.216–279.

Boyer, Christopher R..2003. *Becoming Campesinos*, (Stanford,California : Stanford University Press).

Chamoreau, Claudine.1996. "Falta de Transmición y Revitalización : La Problemática Actual del Phurhépecha," *Chicomóztoc*,5,mayo, pp.71–93.

Embriz Osorio, Arnulfo y Ricardo León García.1982.*Documentos para la Historia del Agrarismo en Michoacán*, (México : Centro de Estudios Históricos del Agrarismo en México).

Friedrich, Paul. 1977.*Agrarian Revolt in a Mexican Village : With a new Preface and Supplementary Bibliography*, (Chicago : University of Chicago).

―――――. 1984 (primera reimpresión). *Revuleta Agraria en una Aldea Mexicana*, (tra.) Roberto Ramón Reyes Mazzoni, (México : Centro de Estudios Históricos del Agrarismo en México/ Fondo de Cultura Económica).

―――――. 1986.*The Princes of Naranja : An Essay in Anthropological Method*, (Austin, Texas : University of Texas).

Guzmán Avila, José Napoleón.1984. "Movimiento Campesino y Empresas Extranjeras : La ciénega de Zacapu 1870–1910",en Ángel Gutiérrez et al. (eds.), *La Cuestión Agraria : Revolución y Contrarrevolución en Michoacán*. (Tres Ensayos), pp.27–39. (Morelia, Michoacán, México : Universidad Michoacana de San Nicolás de Hidalgo).

INEGI (Instituto Nacional de Estadística, Geografía e Informática). 1991. *MICHOACÁN : Resultados Definitivos Datos por Localidades, XI Censo General de Población y Vivienda*, 1990.

―――. 1996.*MICHOACÁN : Hablantes de Lengua Indígena, Perfil Sociodemográfico*.

Padilla Villicaña, José. 1977. *Tiríndaro: lugar de hermosos amaneceres*, (Morelia, Michoacán, México: Fímax Publicistas).